

憑依妄想調査における信頼性の検討と 憑依妄想の特性について

奈良県立医科大学精神医学教室

飯 田 順 三

RELIABILITY OF SURVEY CONCERNING DELUSION OF POSSESSION AND CHARACTERISTICS OF DELUSION OF POSSESSION

JUNZO IIDA

Department of Psychiatry, Nara Medical University

Received May 29, 1989

Summary: I studied the reliability of surveys concerning delusion of possession and characteristics of delusion of possession. The subjects were psychiatric patients who did not suffer from any organic mental disorders such as dementia, nor from any substance use disorders.

The results were:

- (1) The reliability of surveys concerning delusion of possession was examined in a test-retest fashion by a pair of psychiatrists and the reliability was very high such as Cohen K was 0.83 or 0.93. At the same time the scores of the Brief Psychiatric Rating Scale by the two raters were found to be highly correlated for most of the rating items.
- (2) As to the longitudinal change of delusion of possession, 78.9% of all cases did not change.
- (3) The possession group was significantly more likely to have such delusions as references and love which were related to suggestibility than the non-possession group.
- (4) The possession group was significantly more likely to have such pathological experiences as auditory hallucinations, depersonalizations and passivity experiences than the non-possession group.
- (5) As to the development of delusion of possession of schizophrenia, at first patients began to suffer from auditory hallucinations which commanded them, then from such ego disturbance as passivity experiences and depersonalizations and at the same time delusion of references and grandeur, and at last suffered from delusion of possession.
- (6) As to delusion of possession of schizophrenia, chief personality was not clearly distinguished from possession personality.

Index Terms

delusion of possession, reliability of survey, characteristics

緒 言

憑依とは「何物かが自分にとり憑く」といった、きわ

めて素朴で原始的な体験であり、洋の東西を問わず古くから知られている現象である。また人に憑くと信じられているものには、いろいろの種類があり、神・仏、祖霊、

人間霊、動物霊などがある。さらに憑きものということによって表現されることとしては、憑依現象そのものだけではなく、天災や人災など自然現象や個人の病気をも含む運命を神や霊など超自然的他者の力によって説明される世界観や信仰などがある。こうしたことから憑きものは具体的かつ抽象的な事象を指しており、その定義は歴史学、民族学、民俗学、宗教学、心理学、人類学、精神医学などそれぞれの立場によって異なっている。

歴史的にみると、天明6年山根祐時が著した「出雲国内人狐物語」が、わが国での憑依問題を扱った専門書の前駆をなすものと考えられている¹⁾。次いで文政元年に医師陶山鏡南が「人狐弁惑談」を著している²⁾。しかし憑きもの研究では、民俗学の貢献する部分が大きく、特に柳田国男の研究³⁾が有名である。また、民俗学研究的の集大成として石塚尊俊⁴⁾の「日本の憑きもの」(1959)がみられる。石塚はわが国の憑きもの分布図を作成すると同時に、憑きもの筋の特徴やその社会的問題にも言及している。

精神医学的には、明治期にわが国に西欧近代医学をもたらした Baelz⁵⁾が日本の精神病者に狐、犬神、蛇、狸などの動物憑依の症例の多いことに注目している。その後、門脇⁶⁾は「狐憑病新論」(1902)を著し、森田⁷⁾は1915年に「余の所謂祈禱性精神病に就て」と題する報告を行っている。この森田の研究は、迷信親和性のあるものが恐怖、予期感動を直接原因として、あるいは加持祈禱などの類の事情から人格変換、宗教妄想、憑依妄想などを発する急性あるいは亜急性の精神障害を一種の自己暗示性の精神異常定型とし、これを錯乱、昏迷、人格変換状態の3型に分け、この中に犬神、狐憑きをも編入しようとするものであった。また、憑きものは俗信ともされる民間信仰の文化と分かちがたく結びついて生起するものとして culture bound syndrome の一型とも考えられている。そのような考え方にもとづく研究として、内村⁸⁾らのアイヌのイム、田村⁹⁾の満州の邪病の研究などがあげられる。さらに新福¹⁰⁾は「山陰地方の狐憑きについて」と題する論文の中で、狐憑き病は迷信、暗示にもとづく反応性精神病であり、対人的不安のシンボルとみなすことができると述べている。

最近では特殊な動物の憑依をある特定の地域の民俗学的事象と関連づけて病者の心性を理解しようとする報告⁹⁾¹⁰⁾¹¹⁾や、特定の宗教や生活史や家族状況を中心に憑依の成立を考察する報告¹²⁾¹³⁾や特殊な状況下における憑依の報告¹⁴⁾が散見されるが、そのいずれもが症例報告である。

このように「憑依」に関する研究は従来からしばしば

認められるが、一方で文明の発達とともに憑依状態や憑依妄想が減少しつつあるという俗説もあり、特に森吉¹⁵⁾や佐藤¹⁶⁾らは憑依状態は因習的な状況が変化するにつれて減少すると考えた。また宮本¹⁷⁾は欧米では憑依の語はいまや死語になりつつあると述べている。さらに藤森¹⁸⁾は松沢病院の明治・大正・昭和の三代にわたるカルテにもとづく統計的分析によっても憑依妄想は減少傾向にあることを示している。しかし、われわれは日常臨床の場でしばしば憑依妄想に遭遇することから、憑依妄想は現実には決して減少していないと考え、このことを実証するために1982年～1987年にかけて全国各地の精神病院9施設に入院中の患者1029例を対象に憑依妄想に関する実態調査を行った¹⁹⁾。その結果憑依妄想出現率は全体で20.7%であった。この値は我々が当初予想したよりもはるかに高い出現率であった。藤森の報告では5%程度であり我々の調査ではその4倍以上認められた。

この出現率の高さについては次のようなことが考えられた。第一にこの調査では過去における憑依体験も含めたこと。つまり調査時点ですでに憑依妄想は消失していたが、患者との直接面接やカルテの参照によって以前に憑依妄想を保有していたことがあると判断された者が含まれているために出現率が増加したのではないかということである。実際に調査時点で憑依妄想が認められたのは対象患者の7.7%であった。第二にこの調査では入院患者を対象としており、かつ精神分裂病患者が多かったことである。高橋²⁰⁾は分裂病性の憑依妄想は、分裂病性の異常体験に基づいて作られた意味づけの色彩の強いものが多く含まれる可能性があるとして述べている。この調査で対象を分裂病に限ると憑依妄想出現率は21.7%となり、対象を分裂病に限っている藤森の報告との違いはより一層明確となる。第三に調査方法の問題がある。この調査ではあらかじめ質問項目を作製し、乱数表を用いて無作為に患者を選び、直接検者が患者と1対1で面接して調査した。このため評定者の主観がなるべく排除されるよう工夫して調査が行われたが、評定者の質問の仕方、期待度、判断力などによって異なる回答が得られる可能性も存在する。

最近精神科においては精神症状を把握するさいの評価尺度についてその信頼性の検討を行うことに関係者の関心が高まっており、北村²¹⁾らが各種の評価尺度の信頼度を検定している。そこで今回著者もこの憑依妄想調査の信頼度を検定することにより、調査の信頼性についての検討を試みた。またあわせて憑依妄想の経時的变化や憑依妄想と他の病的体験との関連性を調べ、憑依妄想の成因について若干の考察を行い、さらに憑依妄想の発見と

臨床的有用性について言及した。

対象と方法

第1に憑依妄想調査の対象病院であった奈良県南部のS精神病院での調査時点で憑依妄想を有したことがあるもの23名のうち4名がすでに死亡していたため残りの19名に関して6年後の1988年に憑依妄想がどのように変化したかを調査した。あわせてこの19名の患者を対象に再試験法により信頼度の検討を行った。この場合まず著者(第1面接者)が患者と1対1で面接を行った後に日をあらためて別の精神科医M(第2面接者)が面接をし、著者と同じ質問を行い憑依妄想の有無について検討した。ただしMは対象患者が以前憑依妄想を有していた患者であることも、第1面接者の結果も知らされていない。(精神科医歴:著者8年, M2年)。面接時質問内容は①妄想の有無②憑依妄想の有無③幻覚の有無④憑依内容であった。また同時に Brief Psychiatric Rating Scale (BPRS) の項目について評価記載した。憑依妄想の評定者間信頼度は Cohen²²⁾の k 係数にて求め、BPRSの各項目に関する評定者間信頼度は Pearson の積率相関で求めた。上記の調査をA調査とする。

第2に前回憑依妄想調査を行ったS病院に最近4年以内に入院した患者で、いずれも前回調査を実施していない、器質性精神障害を除く40名についてあらたに憑依妄想調査を行った。この場合も著者(第1面接者)とM(第2面接者)が別々に面接を行う再試験法を採用し、あわせてBPRSの評価も行い、それぞれのCohenの k とPearsonの積率相関で評価者間信頼度を求めた。これをB調査とする。

第3に前回の調査時点で憑依妄想を有していたことがあるとされた19名の患者のうち、A調査で否定された3名を除く16名と、B調査で憑依妄想を有したことがあると述べた12名を合わせた憑依妄想群28名とB調査で憑依妄想を有したことがないとされた非憑依群28名について他の妄想・幻覚・作為体験・離人症・人格変換の有無に関して比較検討を行った。

第4に憑依内容が患者にとって守護的なものか敵対的なものかを憑依群28名について調査し上記の病的体験との関連を合せて憑依妄想の特性及び成因について検討した。

結果

1. A調査の患者背景

表1にA調査において対象となった19名の患者背景を示した。男子11例女子8例であり地域別では市部が4

例で、郡部が15例であった。学歴は中学卒が多く、家の職業は農業が多かった。今回の調査時点では退院して外来通院中の患者が8例認められたが、それらの患者は概して精神症状は軽快していた。診断はDSM-III-R²³⁾によったが、精神分裂病が17例で分裂感情障害が2例認められた。信仰する宗教としては仏教が8例、神道が5例、キリスト教1例で信仰する宗教なしが5例であった。また精神科を受診する前に祈禱師や占い師、あるいは神社や寺院に相談に行った例が6例認められた。

2. 憑依妄想の経時的変化

同じ19名の患者を対象とした1982年調査と1988年の憑依妄想調査との変化を表2に示した。1982年の調査時点で憑依妄想を有していた症例2, 5, 6, 9の4例は、1988年の調査時点では全員消失していた。

逆に1982年調査時点では憑依妄想を有していなかった症例12と13は1988年調査時点で憑依妄想を有していた。この2例は1982年の調査時点で過去の憑依妄想の存在を認めていることから一旦消失した憑依妄想が再び出現したと考えられる。しかも、その憑依内容は過去の憑依内容と同じものであった。

憑依内容について変化の認められなかった症例が19例中15例(78.9%)であった。憑依内容が変化したのは症例9, 10, 18, 19の4例であり症例9と10は憑依内容が不明な物から「なし」に変化している。つまり1982年調査の時には「何かわからないが何かかとり憑依していたことがある」と答えていたのに、1988年調査で「今までにとり憑かれたことはない」と答えているのである。症例18は憑依内容が神からフクロウに変化し、症例19は母親から「なし」に変化している。

憑依内容の変化が認められなかった代表的な症例3と変化の認められた症例9と18について病状の経過を記述する。

症例3 40才男性, 精神分裂病

家族歴 母方のいとこが精神分裂病, 両親がいとこ同士

生活歴 工業高校卒業後, 染色関係の会社に勤務していたが, 2年後に辞めて実家の近くの役場に勤務していた。

現病歴 昭和49年役場の職員が自分の悪口を言っているという被害的な幻聴が出現し, 奈良医大精神科を受診。3カ月通院し軽快した。しかし, 職場復帰後すぐに再発し, 上記の幻聴に加えて「暴力団員がおそってくる」という被害関係妄想や「頭がすっぽぬける。心臓があやつられる」などの心氣的訴えと作為体験が出現し, 作為体験が増強するにつれて悪霊が憑いているという憑依妄

Table 1. Background of the cases with delusion of possession in 1982 survey

Case No.	Sex	Age	Rural or Urban	School career	Occupation	Duration of hospitalization (Year)	Number of hospitalization	Duration of disease (Year)	Age of onset	Diagnosis (DSM III-R)	Religion	Consulting fortuneteller or priest
1	M	38	Rural	J. H. S.	Agriculture	14	1	14	24	Schizophrenia	Nothing	(-)
2	M	48	Rural	J. H. S.	Factory Worker	5	7	30	18	Schizophrenia	Nothing	(+)
3	M	40	Rural	H. S.	Agriculture	15	1	15	25	Schizophrenia	Buddhism	(-)
4	M	43	Rural	J. H. S.	Priest	Outpatient	4	13	30	Schizophrenia	Buddhism	(-)
5	M	35	Rural	J. H. S.	Barber	Outpatient	2	12	23	Schizophrenia	Christian	(-)
6	M	37	Urban	H. S.	Businessman	Outpatient	3	17	20	Schizophrenia	Shinto	(-)
7	M	29	Rural	J. H. S.	Agriculture	Outpatient	2	6	23	Schizophrenia	Nothing	(-)
8	M	31	Rural	H. S.	Agriculture	Outpatient	1	5	26	Schizoaffective Disorder	Buddhism	(+)
9	M	37	Rural	J. H. S.	Agriculture	5	3	10	27	Schizophrenia	Buddhism	(-)
10	M	36	Rural	J. H. S.	Agriculture	9	1	9	27	Schizophrenia	Nothing	(+)
11	M	42	Rural	J. H. S.	Agriculture	Outpatient	5	13	29	Schizophrenia	Shinto	(-)
12	F	67	Urban	J. H. S.	Agriculture	15	1	16	51	Schizophrenia	Shinto	(+)
13	F	41	Rural	J. H. S.	Foodshop	3	3	16	25	Schizophrenia	Shinto	(+)
14	F	35	Urban	J. H. S.	Businessman	8	4	13	22	Schizophrenia	Buddhism	(+)
15	F	31	Urban	H. S.	Businessman	Outpatient	3	6	25	Schizophrenia	Shinto	(-)
16	F	44	Rural	H. S.	Agriculture	Outpatient	1	6	38	Schizoaffective Disorder	Buddhism	(-)
17	F	50	Rural	J. H. S.	Agriculture	14	3	26	24	Schizophrenia	Nothing	(-)
18	F	47	Rural	J. H. S.	Agriculture	10	3	25	21	Schizophrenia	Buddhism	(-)
19	F	42	Rural	H. S.	Businessman	13	4	23	19	Schizophrenia	Buddhism	(-)

J. H. S.: Junior High School

H. S. : High School

Table 2. Longitudinal change of delusion of possession

Case No.	1982			1988		
	Present	Past	Content	Present	Past	Content
1	-	+	Human	-	+	Human
2	+	+	Spirit	-	+	Spirit
3	-	+	Spirit	-	+	Spirit
4	-	+	Evil Spirit	-	+	Evil Spirit
5	+	+	Evil Spirit	-	+	Evil Spirit
6	+	+	Spirit	-	+	Spirit
7	-	+	God	-	+	God
8	-	+	Fox	-	+	Fox
9	+	+	Unknown	-	-	Nothing
10	-	+	Unknown	-	-	Nothing
11	-	+	Human	-	+	Human
12	-	+	Fox	+	+	Fox
13	-	+	God	+	+	God
14	-	+	God	-	+	God
15	-	+	God	-	+	God
16	-	+	God	-	+	God
17	-	+	God	-	+	God
18	-	+	God	-	+	Owl
19	-	+	Mother	-	-	Nothing

想に発展した。同年入院するが上記の病的体験は頑固に持続し、さらに「私は宇宙である」という誇大妄想も加わり現在に至っている。しかし、憑依妄想に関しては、当時一過性に出現したのみで3カ月程で消失している。

症例9 37才男性、精神分裂病

家族歴 中学卒業後、左官屋の見習いをふりだしに、プレハブの組立、土木作業員など職を転々としていた。

現病歴 昭和54年、独語、空笑が出現し、「皆が自分の悪口を言っている」「電波で家の中を調べ自分の行動を監視している」などの被害的な幻聴や注察妄想が認められるようになり、1回目の入院となった。この時は2カ月で症状軽快し退院した。昭和56年に同様の症状が再発し、その際「女性の声で自分に命令する」ような幻聴が強かったため「何かがとり憑いている」と感じた。憑依妄想は2カ月で消失したが、他の病的体験は持続し2年間の入院生活を送った。昭和58年軽快退院後自宅であら

ぶらした生活を送っていたが昭和59年に同様の症状が再発し、同時に憑依妄想も認められた。

現在幻聴は持続しているが憑依妄想に関しては「とり憑かれているように思ったこともあるが、あれは勘違いだった。とり憑かれたことはない」と否定している。

症例18 47才女性、精神分裂病

家族歴 母親が精神分裂病

生活歴 中学卒業後洋裁学校に一年通い、その後家で家事手伝いをしていた。

現病歴 昭和39年、21才時に不安、焦燥感、妄想気分が続く不穏興奮状態にて発症。同時に自分に命令する幻聴も認められ、2年間入院した。軽快退院後、弟の店を手伝っていたが昭和43年に再発し、命令性の幻聴が著しくその際神が憑いていると感じた。10年間の入院生活の後軽快退院するが、昭和54年に同様の症状にて再発し、現在に至るまで入院している。現在は命令性の幻聴は持

Table 3. Inter-rater reliability of survey concerning delusion of possession

Case No.	1st Interviewer	2nd Interviewer
1	Human	Human
2	Spirit	Spirit
3	Evil Spirit	Evil Spirit
4	Spirit	Spirit
5	Evil Spirit	Evil Spirit
6	Spirit	Spirit
7	God	God
8	Fox	Fox
9	Nothing	Nothing
10	Nothing	Nothing
11	Human	Nothing
12	Fox	Fox
13	God	God
14	God	God
15	God	God
16	God	God
17	God	God
18	Owl	Owl
19	Nothing	Nothing

続しているが、その他の病的体験には乏しく、むしろ無為、自閉的で疎通性に乏しい陰性症状を中心とする慢性欠陥状態である。

憑依内容が変化したことについて、患者は「神が憑いたと思ったことはない。フロウが憑いていたんだ」と今回の調査では述べている。外泊中に近所でフロウがよく鳴いていたらしくその事が関与している可能性が推察される。

3. 憑依妄想調査Aの評定者間信頼度(1)

A調査において再試験法による評定者間信頼度を検討し、その結果を表3に示す。症例11のみが著者とMとで違いが認められたが、他の18例に関しては全く同じ判断が得られた。Cohenの k 係数は0.83で信頼度の高い結果であることを示している。

4. A調査におけるBPRSの評定者間信頼度

A調査において、著者とMが再試験法によるBPRS評価を記載し、信頼度を検討した(表4)。18項目のうち14

項目で有意な相関を示した。見当識障害で相関係数が出なかったのは著者とMが全て同じ評定をしたためである。憑依妄想が関与すると思われる思考内容の異常や幻覚でも高い相関率が認められた。相関率の低い項目は罪業感、緊張、運動減退、非協調性の各項目であった。

5. 憑依妄想調査Bにおける患者背景と憑依妄想出現率

B調査において対象とした患者の背景を表5に示した。男子20例女子20例で平均年齢は 38.4 ± 12.2 才であった。罹病期間は 10.9 ± 8.2 年であり、DSM III-Rの診断基準によると精神分裂病が37例認められた。

またこの調査では、憑依妄想は12例で全体の30%に認められた。そのうち男子は5例(25%)で女子は7例(35%)に認められた。これはS病院における前回の調査時の憑依妄想出現率(28.4%)とはほぼ同様であった。

6. 憑依妄想調査Bにおける評定者間信頼度

B調査で憑依妄想を有したことのある12例の背景を表6に示した。同時に再試験法による憑依妄想調査の結果を示した。12例中11例が精神分裂病であり、調査時点で憑依妄想を有していたのは3例であった。

憑依内容に関しては、著者の調査では神が5例で祖先、霊、人、母、仏、不明物、キツネが各1例であった。前回の調査でも神が最も多く、今回の調査と一致していた。

また、この調査で著者とMで憑依の有無について異なる応答をしていたのは症例10のみで、著者には神と答えたがMには「なし」と答えていた。著者に「なし」と答え、Mに何か憑依内容を答えた症例は認められなかった。さらに調査時に憑依妄想を有していた3例は全て著者とMで同じ答が得られた。このB調査における評定者間信頼度はCohenの k 係数が0.93で高い信頼度であった。

A調査では、著者は患者が以前憑依妄想を有していた事実を事前に知っており、Mは知らないという条件下であったが、B調査では著者もMもともに未知の条件下で行われた。

このように2つの調査は異なった条件下で行われたが、Cohenの k 係数はともに高い値を示し、憑依妄想調査の信頼度の高いことを示した。

7. B調査でのBPRSの評定者間信頼度

B調査で憑依妄想を有したことのある12例について、著者とMが再試験法によるBPRS評価を記載し信頼度を検定した(表7)。運動減退を除く全項目で有意な相関を示した。特に心氣的訴え、罪業感、衝動的な行動や姿勢、誇大性、疑惑、幻覚、思考内容の異常、情動鈍麻、興奮の各項目で高い相関を示した。

8. 憑依妄想と他の妄想との関連

Table 4. Inter-rater reliability of BPRS(1)

Item	Coefficient of correlation	P
Somatic concern	.677	**
Anxiety	.546	*
Emotional withdrawal	.567	*
Conceptual disorganization	.749	***
Guilt feelings	.278	NS
Tension	.278	NS
Mannerism and posturing	.839	***
Grandiosity	.954	***
Depressive mood	.703	***
Hostility	.666	**
Suspiciousness	.693	**
Hallucinatory behavior	.783	***
Motor retardation	.265	NS
Uncooperativeness	.059	NS
Unusual thought content	.684	**
Blunted affect	.749	***
Excitement	.747	***
Disorientation	—	—

*P<0.05 **P<0.01 ***P<0.001

Table 5. Background of the cases in 1988 survey

No. of Cases	40
Sex	Male 20 Female 20
Age	38.4±12.2
Duration of hospitalization	18.7±10.2 (Months)
Duration of disease	10.9± 8.2 (Years)
No. of hospitalization	3.0± 2.2
Diagnosis (DSM III-R)	Schizophrenia : 37, Others : 3

A調査における対象患者19例のうちA調査で憑依を否定した3例を除く16例とB調査で憑依妄想を有したことがあると述べた12例を合わせた28例を憑依群とし、B調査で憑依の経験がないと述べた非憑依群28例とを比較し、憑依妄想と他の妄想との関連について検討し、その結果を表8に示した。

憑依群は非憑依群と比較して、全体的に多くの妄想を

有している。即ち、憑依群では1例につき平均3.25種類の妄想を有しており、非憑依群では平均1.0種類の妄想を有していた。保有している妄想の種類は統計学的に有意に憑依群が非憑依群より多かった。(t=6.91, p<0.01)

妄想の種類別では、迫害妄想($\chi^2=4.791$, $df=1$, $p<0.05$), 関係妄想($\chi^2=16.092$, $df=1$, $p<0.001$), 注察妄想($\chi^2=5.250$, $df=1$, $p<0.05$), 追跡妄想($\chi^2=$

Table 6. Background of the cases with delusion of possession and inter-rater reliability of survey concerning delusion of possession in 1988

Case No.	Sex	Age	Duration of hospitalization (Months)	Duration of disease (Years)	Number of hospitalization	Diagnosis (DSM III-R)	Contents of delusion of possession		
							Present	1st Interviewer	2nd Interviewer
1	M	27	36	4	1	Schizophrenia	+	Ancestor	Ancestor
2	M	40	40	12	2	Schizophrenia	-	God	God
3	M	25	1	1	1	Schizophrenia	-	Unknown	Unknown
4	M	33	12	7	1	Schizophrenia	+	Spirit	Spirit
5	M	34	4	12	4	Schizophrenia	-	God	God
6	F	33	12	15	10	Schizophrenia	-	God	God
7	F	32	24	12	3	Schizophrenia	-	God	God
8	F	37	1	4	1	Schizoaffective	+	Fox	Fox
9	F	39	24	20	6	Schizophrenia	-	Human	Human
10	F	40	36	20	4	Schizophrenia	-	God	Nothing
11	F	24	3	3	4	Schizophrenia	-	Mother	Mother
12	F	36	3	3	2	Schizophrenia	-	Buddha	Buddha

Table 7. Inter-rater reliability of BPRS(2)

Item	Coefficient of correlation	P
Somatic concern	.769	***
Anxiety	.663	**
Emotional withdrawal	.421	*
Conceptual disorganization	.668	**
Guilt feelings	.841	***
Tension	.426	*
Mannerism and posturing	.797	***
Grandiosity	.921	***
Depressive mood	.686	**
Hostility	.692	**
Suspiciousness	.703	***
Hallucinatory behavior	.813	***
Motor retardation	.314	NS
Uncooperativeness	.597	*
Unusual thought content	.734	***
Blunted affect	.787	***
Excitement	.718	***
Disorientation	—	—

*P<0.05 **P<0.01 ***P<0.001

Table 8. Comparison of possession group and non-possession group about other delusion

Contents of delusion	Possession group (N=28)	Non-possession group (N=28)	P
Persecution	21	13	*
Reference	21	6	***
Observation	7	1	*
Persuit	6	1	*
Poisoning	4	2	NS
Hypochondriacal	8	4	NS
Sin and guilt	1	0	NS
Poverty	1	0	NS
Grandeur	10	1	**
“ Abstammung ”	2	0	NS
Love	10	0	***
Total	91	28	

*P<0.05 **P<0.01 ***P<0.001

4.082, $df=1$, $p<0.05$), 誇大妄想 ($\chi^2=9.164$, $df=1$, $p<0.01$), 恋愛妄想($\chi^2=12.174$, $df=1$, $p<0.001$)で憑依群は非憑依群より有意に多くの妄想を有していた。一方被毒妄想, 心気妄想, 罪業妄想, 貧困妄想, 血統妄想では両群間に有意差が認められなかった。

9. 憑依妄想と他の病的体験との関連

憑依群と非憑依群が, 他にどのような病的体験を有しているかを調査し, その結果を表9に示した。憑依群は非憑依群に比較して多くの病的体験を有しており, 幻視 ($\chi^2=6.720$, $df=1$, $p<0.01$), 幻聴($\chi^2=17.150$, $df=1$, $p<0.001$), 体感幻覚 ($\chi^2=6.487$, $df=1$, $p<0.05$), 作為体験($\chi^2=29.947$, $df=1$, $p<0.001$), 離人感($\chi^2=28.571$, $df=1$, $p<0.001$)で有意差が認められた。人格変換に関しては憑依群においても2例にしか認められず有意差は認められなかった。

10. 憑依内容の守護性について

憑依群の患者を対象として, その憑依内容が患者にとって守護的なものであるか, 敵対的なものであるかを調査し, その結果を表10に示した。憑依現象が守護的なものであると答えた6例のうち4例は神の憑依であり, 霊と母親が各1例ずつ認められた。一方, 敵対的なものであると答えた8例のうち3例が神の憑依であり, キツネと悪霊が2例, 霊が1例に認められた。また憑依現象は必ずしも守護的なものと敵対的なものとの区別がつけられず, 「どちらでもない」という回答も14例に認められた。

考 察

憑依妄想は文明の発達と因習的な状況の変化によって減少するという説がある一方で, 著者らはしばしば日常

Table 9. Comparison of possession group and non-possession group about other pathological experiences

	Possession group (N=28)	Non-possession group (N=28)	P
Visual hallucination	6	0	**
Auditory hallucination	27	13	***
Cenestopathy	8	1	*
Passivity experience	21	1	***
Depersonalization	24	4	***
Personality change	2	0	NS

* $p<0.05$ ** $P<0.01$ *** $P<0.001$

Table 10. Goodness or badness of delusion of possession

Contents of possession	Good	Bad	Neither good nor bad	Total
God	4	3	4	11
Spirit	1	1	2	4
Evil spirit	0	2	0	2
Human	0	0	3	3
Fox	0	2	1	3
Buddha	0	0	1	1
Unknown	0	0	1	1
Mother	1	0	0	1
Owl	0	0	1	1
Ancestor	0	0	1	1
Total	6	8	14	28

臨床の場で憑依妄想に遭遇するため、憑依妄想は現実には減少していないことを実証するため、著者は以前に日本各地の精神病院に入院中の患者 1029 例を対象に憑依妄想に関する調査を行い、以下のような知見を報告した¹⁹⁾。即ち、憑依群と非憑依群の比較では、性別、市・郡の別、学歴別、職業別では有意差が認められず、宗教、占い等の関与の面で有意の差が認められた。

憑依妄想を呈する患者の特性について、大宮寺²⁴⁾や新福⁹⁾らは無学な中年の女性に多いと報告しているが、著者の調査では、学歴や性に関しては特徴を示さなかった。宗教に関しては信仰する宗教のある者の方がいない者より憑依群に多く、特に、神道(旧, 新を含む)や新興宗教で憑依群が多かった。また憑依内容に関しては、神が最も多く、次いで霊, 人, キツネ, 仏の順であった。地域特性に関しては東京で憑依妄想が少なく沖縄が多かった。沖縄では祖先崇拝やユタの存在が憑依と関与すると考えられた。以上の知見に加えて、著者らに最も興味深かったことは、憑依妄想出現率が 20.7% と高率に認められたことである。他の報告¹⁸⁾²⁴⁾に比べて非常に高い出現率であり、著者らの当初の予想をはるかに越えるものであったことから著者はこの憑依妄想調査結果の信頼性を検討する必要があると考え、今回の研究を行った。

精神医学研究においては、生化学的、精神生理学的、精神薬理学的指標の測定法については、非常に厳密な検討が加えられているにもかかわらず、研究の標的であるべき精神症状の測定法に関して信頼性の検討がおこなわれるようになったのは、ごく近年になってからである。

同一の患者の症状については精神科医間で不一致が出現することは、臨床の場面でしばしば認められる。この原因として、5つの要因が考えられている²⁵⁾。第1の不一致の要因は、被検者分散であり、これは被検者自身の状態に由来する不一致である。第2の要因は、状況分散であり、これは被検者の様子は同じであるが、評価を施行する面接状況が異なるため、異なる情報が出現する不一致である。第3の要因は、情報分散であり、検者が異なる質問をするため異なる情報が出現する不一致である。第4の要因は、基準分散で、これは同一の情報についてそれを判断する基準が異なるための不一致である。第5の要因は、観察分散である。これは同一の情報が与えられた場合に、症状として判断する水準が評定者によって異なることに由来する不一致である。

憑依妄想調査においても同様に、被検者の状況が異なっていたり、検者の質問の仕方が違うことにより異なる情報が出現する可能性がある。ただし著者は憑依妄想として判断する基準を以下のように定義した。即ち、患

者自身が「実際に身体に何かが憑いている」と述べた者のみを憑依妄想が存在していると判断し、作為体験や幻覚のみにとどまる者は除外した。

上述の理由による評価の不一致は存在するが評価の信頼性を検定するのにいくつかの方法が開発されている。第1に同席面接法は同一の被検者に複数の検者が同席して評価する方法である。この方法では評定者に与えられる情報は同一であるため、情報分散および状況分散が統制される。第2にもっとも厳密な信頼性検定法と考えられている再試験法がある。これは同一の被検者について、複数の評定者が一定の時間間隔をおいて別個に面接評価し、その後には評点を比較する手法である。この方法では前述の評定の不一致の原因となるすべての要因が出現する可能性があり、したがって再試験法による信頼度が高ければ、その調査は信頼できるものと言える。

今回著者は、上記のことを考慮して再試験法による信頼度を検定し、有意性の検定は偶然の一致率を差し引くことができる Cohen の k 係数を用いた。この結果、A調査でも B調査においてもそれぞれ Cohen の k 係数は 0.83, 0.93 と高い値を示し、憑依妄想調査の信頼度の高さを示した。また今回の憑依妄想調査でも憑依妄想出現率は 30% であり、前回の S病院における調査結果とはほぼ同様の結果を得た。

次に、憑依妄想を有したことがあると述べた患者について、BPRS を用いて評価し評定者間信頼度を検定した。BPRS は精神病像を中心とし、さらにそれ以外の精神症状までを範囲に包括した評価尺度として有名であり、日本においても主として精神分裂病を対象とした研究で繁用されている。北村²⁶⁾らは精神分裂病と感情障害の患者を対象に再試験による評定者間信頼度を検定しているが、それによると、誇大性、幻覚、情動鈍麻、興奮などの項目が高い相関を示し、緊張、非協調性の項目が低い相関を示していた。この結果は著者らの調査と非常に類似しており、BPRS の信頼度の高さを示すと同時に著者と Mの評定者としての信頼度の高さを示しているといえよう。

また、著者は憑依妄想の縦断的变化を調査し興味ある知見を得た。憑依内容について変化の認められなかった症例は 78.9% であり、変化の認められた症例は不明物から憑依経験なしに変化したものが 2例認められた。憑依妄想の変化が認められたのは、前回調査時には命令性の幻聴や作為体験の症状に圧倒されその病的体験を理解しようとして、「何かが憑いている」と感じていた者がその後症状の軽快とともに病的体験と一定の距離をおいて冷静に処理できるようになったことから「勘違いであった。

何も憑いていなかった」と判断し、検者の質問に「今までとり憑いたことはない」と答えている。これは高橋²⁰⁾の指摘するように、分裂病性の憑依妄想は分裂病性の異常体験に基づいて作られた意味づけの色彩の強いものが多いという説を支持するものである。

症例 18 のように憑依内容が神からフロウに変化した症例では、やはり前回の調査時には命令性の幻聴から発展して憑依妄想を有している、憑依内容は特に理由なく漠然と神であったが、ある時外泊時に近所でフロウがよく鳴いているのを聞いてフロウが憑いていると解したと述べている。これは関係妄想から妄想知覚に類似した精神病理が作用していると考えられる。

憑依内容に変化の認められなかった症例でも、憑依妄想が出現する前に多くの病的体験が出現し、また憑依妄想は他の病的体験に比べると早く消失する傾向が認められた。

憑依妄想と他の妄想との関連については、憑依群と非憑依群の比較から、憑依群は有意に多くの妄想を有し、特に関係妄想、誇大妄想、恋愛妄想が憑依群で多く認められた。諏訪²⁷⁾は憑依妄想は被暗示性の強い性格者に出現しやすいと述べているが、関係、誇大、恋愛妄想も被暗示性の強さと関連していると推察される。

また、今回の調査の結果、憑依妄想を有する患者は多くの病的体験を有していることが明らかになった。特に幻聴、作為体験、離人感が多く認められた。幻聴は命令性の幻聴が多い傾向が認められた。

憑依状態の精神病理学的研究としては、萩野²⁸⁾は Janet と Ey の有機力動説の立場から憑依状態の考察を行っている。また、久場²⁹⁾は主人格に憑依人格が侵入していく過程を段階的に区分し、力動精神医学的考察を行っている。即ち、まず第 1 段階では憑依人格は主人格の外部に定位し、幻聴や幻視にとどまる。次いで作為体験や体感幻覚や不随意運動が出現し、主人格の内部に憑依人格が定位される。この時点で憑依妄想が出現する。さらに進行すると、エクスターゼや意識の変容を呈し、主人格と憑依人格の内部境界が消失し憑依人格が圧倒的に優越する段階となる。最終的には人格変換を呈することになる。

著者の調査した精神分裂病の憑依妄想は、人格変換を呈するものは少なく、主人格の内部に憑依人格が定位するものが多数認められた。また著者の調査では精神分裂病の憑依妄想の成立過程は、まず命令性の幻聴に始まり作為体験や離人感などの自我障害が著明となり、同時に関係妄想や誇大妄想が出現し、多くの病的体験に圧倒されて憑依妄想に発展していく過程が認められた。この場

合分裂病の憑依妄想では主人格と憑依人格は明確に区別されておらず混然となっていた。

Yap³⁰⁾も憑依について以下のように述べている。つまり憑依とは「Self」の一部である「Me」の異常な劇化によって起こる状態である。すなわち Self (自己) は、正常において主人格と Me (主人格以外の人格特性で、他者の人格の摂取および同一化との関係において生ずるもの) から成り立っている。しかも正常では主人格が主導権を握っており、Me は下位人格として主人格のもとに統一されている。ところが異常な状況において、たとえば解決されない持続的葛藤および危機的状況では、これらの Me の一部が一時的に病的あるいは異常に優越して独立した主人格にまで発達し、神靈などの憑依人格となって、その状況を打ち破るべく主人格と入れ代わってしまう。これが憑依状態であると Yap は述べている。

今回の調査では憑依内容が患者にとって守護的なものであるか、敵対的なものであるかを調べた。民俗学では憑きものといえば動物による憑依を意味し、神仏や人間霊による憑依とは区別して考えられている。これは動物霊が人間に害を与える霊であり、神仏霊が人間に恩恵を与える霊であるという考え方に由来する。精神医学においても宮本¹⁷⁾は神仏や人間霊による憑依では憑かれた本人は自分がそれによって守護されていると信じ、嫌悪感を抱かれない場合が多いが、逆に動物に憑かれる状態では、憑かれた本人からも世間からも嫌悪されるのが普通であるとし、動物憑依としての憑きものを区別するのが適切であると述べている。

今回の調査では必ずしも上記のような結果ではなかった。神や霊においても守護的なものもあれば敵対的なものもあり、最も多いのは守護的なものでもないというものであった。かつて民俗学では憑依内容は憑かれた本人に害を与えるか、守護的であるかに明確に二分されていたが、最近の憑依妄想ではそのような明確な区別がなくなっているのが特徴といえるかもしれない。

最後に、今回の調査で憑依妄想調査の信頼性の高さが証明され、憑依妄想を有したことのある患者が入院患者の 20% 以上に認められることが明らかとなった。また前回の調査で得られた結果に関して憑依妄想出現率のみではなく、憑依内容や憑依群の特性、さらに地域特性についても妥当な結果であると考えられる。

憑依妄想出現率に関しては、近年の臨床諸家の予想をはるかに超えるものであったが、興味深かったことは前回の調査でも今回の調査においても、主治医が患者の憑依妄想に気づいていなかった例が意外に多く認められた

ことである。この理由として、まず主治医の側に憑依妄想という症状が念頭にないため、それに関する質問を患者に全くせず、情報を得ていない点が考えられる。次に患者側の要因としては幻聴や被害妄想、関係妄想などの症状は積極的に主治医に述べるが、憑依妄想に関しては、患者の側から積極的に述べられることが意外に少ないことがあげられる。このため我々臨床家はいくつ憑依妄想を見逃しがちであり、憑依妄想は現代社会では稀なことであると思いがちである。しかし、決して憑依妄想は減少しておらず、また今回の調査で憑依妄想を有している患者は他に多くの病的体験を有していることが明らかとなったことから、憑依妄想の発見は患者の病態水準を知る重要な指標となる可能性もあり、見逃がしてはいけない注意すべき症状であると考えられた。

結 語

器質性精神障害と中毒性精神障害を除く精神障害者を対象に憑依妄想に関する調査を行い以下の結果を得た。

1. 憑依妄想調査の信頼性を再試験法により検討した結果、高い評定者間信頼度が得られた。また同時に行った憑依群を対象としたBPRSの各項目についても、高い評定者間信頼度が得られた。

2. 時間が経過しても憑依内容に変化の認められなかった症例は78.9%である。変化の認められた症例では、病状の軽快とともに憑依体験を否定する症例が多く認められた。

3. 憑依妄想を有する患者は、他に多くの妄想を有している。特に関係妄想や恋愛妄想など暗示性と関連する妄想が多く認められた。

4. 憑依妄想を有する患者は、他に多くの病的体験を有しており、特に幻聴、作為体験、離人感が多く認められた。

5. 精神分裂病における憑依妄想の成因については、命令性の幻聴に始まり、作為体験や離人感などの自我障害が著明となり、同時に関係妄想や誇大妄想が出現し、多くの病的体験に圧倒されて憑依妄想に発展していく過程が認められた。また主人格と憑依人格は明確に区別されていなかった。

6. 憑依内容において民俗学で指摘されているような患者にとって守護的であるか敵対的であるかの二分性は明確でなく、守護的なものでも敵対的なものでもない場合が多く認められた。

稿を終えるに臨み、御指導、御校閲を賜った井川玄朗教授に心から感謝致します。とともに御校閲を賜った第

2生理学教室榎泰義教授ならびに衛生学教室山下節義教授に深謝致します。さらに終始御指導、御鞭撻頂きました精神医学教室平井基陽助教授はじめ、同教室諸兄姉に感謝の意を表します。

文 献

- 1) 石塚尊俊：日本の憑きもの。未来社，東京，p 12，1972.
- 2) 柳田国男：定本柳田国男集第9巻，筑摩書房，東京，p 266，1969.
- 3) 安井広：E. ベルツの「憑依と類似状態について」，日本医史学雑誌 30：122，1984.
- 4) 門脇真枝：狐憑病新論。東京博文館，東京，p 37，1902.
- 5) 森田正馬：余の所謂祈禱性精神病に就て。精神経誌。14：286，1915.
- 6) 内村祐之，秋本波留夫，石橋俊実：あいぬノいむニ就イテ。精神経誌。42：1，1938.
- 7) 田村幸雄：満州国における邪病，鬼病，巫医及び過陰者並びに蒙古のピロニチ，ライチャン及びボウに就いて。精神経誌。44：40，1940.
- 8) 新福尚武：山陰地方の狐憑きについて。精神医学 1：83，1959.
- 9) 東村輝彦：蛇憑きの2例。臨床精神医学 12：1145，1983.
- 10) 稲田浩，藤原通済：伊予の犬神，蛇憑きの精神病理学的研究。精神医学 21：971，1979.
- 11) 有坂功秀：多彩な動物が憑依した1症例。臨床精神医学 12：1433，1983.
- 12) 高野謙二，加藤敏，石黒健夫：狼憑依を呈した解離型ヒステリーの1例。臨床精神医学 16：181，1987.
- 13) 有賀やよい，三木秀樹，金井秀子：思春期女子にみられた祈禱精神病の1例。精神医学 29：203，1987.
- 14) 村田浩，糸井孝吉：拘禁状況において憑依状態を呈した2症例。精神医学 31：279，1989.
- 15) 森吉利弘，今泉恭二郎，大和彰展：祈禱性精神病について。精神経誌。71：188，1969.
- 16) 佐藤親次，菅野圭樹，高江洲義美：蛙憑きの2症例について一その精神医学的，民俗学的考察。精神医学 17：243，1975.
- 17) 宮本忠雄：憑依状態一比較文化精神医学の視点から。臨床精神医学 8：999，1979.
- 18) 藤森英之：精神分裂病における妄想主題の時代的変遷について。精神経誌。80：669，1979.
- 19) Iida, J.: The current situation in regard to the

- delusion of possession in Japan. *Jpn. J. Psychiatr. Neurol.* **43**: 19, 1989.
- 20) 高橋紳吾：都市における憑依現象。社会精神医学 **7**: 224, 1984.
- 21) 北村俊則, 島 悟：感情および精神分裂病用面接基準と研究用診断基準の評定者間信頼度。精神医学 **28**: 41, 1986.
- 22) **Cohen, J.**: A coefficient of agreement for nominal scales. *Educ. Psychol. Measure* **20**: 37, 1960.
- 23) The American Psychiatric Association: Diagnostic and statistical manual of mental disorders. (Third edition-revised) Washington, D. C. 1987.
- 24) 大宮司信, 田中哲：憑依状態の臨床。臨床精神医学 **8**: 1009, 1979.
- 25) 北村俊則：精神症状測定の理論と実際。海鳴社, 東京, p 26, 1988.
- 26) 北村俊則, 町澤静夫, 丸山晋, 中川泰彬：オックスフォード大学版 Brief Psychiatric Rating Scale (BPRS) の再試験信頼度。精神衛生研究 **32**: 1, 1985.
- 27) 諏訪望：最新精神医学。南江堂, 東京, p 26, 1978.
- 28) 萩野恒一：憑依状態の精神病理学的考察。脳研究 **6**: 115, 1950.
- 29) 久場政博：憑依症候群の精神病理学的ならびに社会文化精神医学的研究。精神経誌。 **75**: 169, 1973.
- 30) **Yap, P. M.**: The possession syndrome—a comparison of Hong Kong and French findings. *J. Men. Sci.* **106**: 114, 1960.